

## 美しき詩の言葉

### 「海ゆかば」と「父御子御霊の」

文語譯解および英語散文譯

高田 友

その一（行書體は原文）

（一）

「海ゆかば」

海ゆかば水漬く屍かばね

山ゆかば草むす屍

大君の邊にこそ死なめ

顔みはせじかへり

（閑には死なじのど）

（萬葉 大伴家持）

皇國くわうこくの守りにつきて水師すみしに従はば

我が屍しかばね海の藻屑と消えななむ

仇あたなす敵を討たむとて敵陣深く切り込まば

我が屍草に覆はれて朽ちななむ

然りと雖も大君の御爲おんために死ぬるの榮えいに浴する

やはか遺恨を遺すへき

If I am to go to sea to defend my motherland, the Great Imperial State,

My dead body shall be corrupted under water.

If I am to go to the mountain to defeat the invading enemy,

My dead body shall be coiled round by grasses.

I would not hesitate, however, to die for the good of the Divine Emperor,

Leaving no repentance behind.

（11）

「みたみわれ」

御民我生けるしあり天地の榮ゆる時に遭へらく思へば

(萬景 海犬養國麻呂)

それがし、主上の民草にして、この世に生まれ來たるの甲斐ありといふべし。ああ、偉大なる聖帝の御代に際會したるかな。萬邦に冠絶する神の國、天も地も榮えて已まぬこの大御代に。

I am His Majesty's subject, resting assured that I didn't come into this world for nothing. I am born in the reign of the great sacred emperor of the Divine Land, when heaven and earth are in maximum prosperity.

### (三)

#### 「日の丸行進曲」(第四聯のみ)

去年の秋よ強兵に

召し出だされて日の丸を

敵の城頭高々と

一番乘りに打ち立てた

手柄はためく勝ちいくさ

さは去年の秋、かしこくも

大君の御爲に出征を命ぜられたり。

ここもと敵陣に駆け入りて、

砦の頂に日の丸を掲ぐるを得たり

ああ、この響、分に過ぐる喜びならずや。

It was last autumn that I was chosen as a soldier  
To go to war for the honor of His Majesty.  
I was the first to climb the wall of the enemy's fortress,  
Where I succeeded in hoisting the flag of the Rising Sun.  
How proud I did myself in contributing to our victory!

## その二

### 讃美歌の簡略言語

讃美歌五四一番に左の如き「頌榮」あり。

「頌榮」(doxology)とは、「三位一體への讃美」の爲に歌はるる祈禱文に曲を附けたる所にして、カトリックにては「榮唱」と言ふ。「頌榮」「榮唱」は數多あれど、その一を御紹介仕るのみ。

ちらみこみたま おほみかみ  
父御子御靈の大御神に

ときは  
常盤に絶えせず御榮えあれ 御榮えあれ

その曲の壯嚴なること、信徒にあらでも自づから頭を垂るるに足ると言ふとも過言ならざるべし。

ああ、妙なるかな、その調べ、何ぞかくも「海ゆかば」に相似たる。

抑々「海ゆかば」を作曲せる信時潔氏はクリスチャンにて、讃美歌の響に倣ひて此れが名曲を創作せられたりとこそは傳へらるれ。

如今、本朝キリスト教界にては、未だ「國語簡易化」の惡習に染まりて、これより脱却するを得ず。文語讃美歌を廢し、徐々に口語文を以て置き換へむとの陰謀進行してあり。あなや、讃美歌五四一番の口語版はすでに發表せられてあり。いはく、

ちらみこみ  
父・子・聖靈のひとりの主よ

榮えと力はただ主にあれ、永久まで

文語版にては「ちちー・みこー・みたーまの」と歌ひたるが、口語版は「ちちー・こせー・いれーの」となる。「こせー・いれーの」とは何ぞや。義に照さずして、強引に音に假名を嵌め込むの愚を犯したり。また「永久に」とは聞けども、「永久まで」とは些か舌足らずの言ひやうにあらずや。

剩へ、本朝新舊兩教會 (Protestant; Catholic) の方針に徴するに、明治以來の讃美歌の歌詞は國家神道の影響を受くるの條甚だ多く、「近隣諸國」への配慮あるべく、かかる用語を斥くべしとの聲高らかなり。

しかれども、キリスト教の歴史を繙けば、神を「デウス」と稱ふるもあり。さは、ギリシア神話の「ゼウス」を借りたるなり。ギリシア神話より借入するは仔細なくして、日本神話の語彙を取るは邪道なりと言ふが如きは相撲部屋の兄弟子のいぢめに異なるなき「無理偏に拳骨」の類にして、理を盡さずと言はずんばあらざるなり。

かかる國家神道排斥の風潮に乗じて「大御神」を斷罪し、かつまた「御子」は皇室の「皇子」を聯想せしむるによりて、謗るに至れるならん。

やんぬるかな。古き日本に繋がるがゆゑに「御子」の「御」を消して、却つて基督に禮を失するとは。

本朝にては、キリスト教會に通ふ者愈々少なく、十年後には半減するの虞ありとの由。

今、美しき文語詩を疎みて讃美歌の流麗なる歌詞を損ね、また以て、信仰に入らんとする若者の意欲を削がんとしてあり。何爲教會の繁榮に寄與するを得べけん。

本朝基督者に訴ふるの條あり。

庶幾くは、文語讃美歌を今一度見直したまはんことを。

「常盤に絶えせず」の歌詞は明治初期には「常盤も堅盤も」と歌ひてありき。「ときは」「かきは」「常岩」「かきは」は「堅き岩」に由來し、洵に美しき詩歌の言の葉なるに、時澆季に及べば、神に仕ふる者も謙虚なる志を失ふに至れるか。

左の如くに歌ひたまへ。

ちち、みこ、みたまの、おほみかみに、ときはもかきはも、みさかえあれ。みさかえあれ。

曲はインターネットを参照せられたし

海ゆかば 《海ゆかば 戦前と戦後の演奏》と打ち込んで検索せられよ。

《行進曲 軍艦(March warship) 海ゆかば 歌詞付き》と打ち込めば、「軍艦行進曲」なれど、間奏の隔に、「海ゆかば(雅樂版)」を歌ひ込むの儀あり。《推奨仕る》

御民われ 《みたみわれ 伊藤武雄》

「日の丸行進曲」「頌榮541」及び「父・子・聖靈のひとりの主よ」は文字をそのまま打ち込めば數多出來すべし。

(令和四年五月二十六日受附)